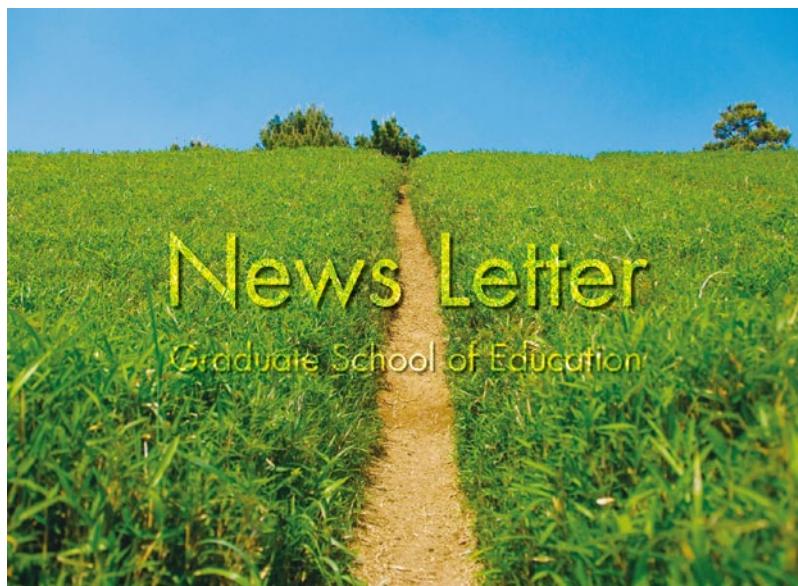


No.22



2011.6

(目次)

● 卷頭言

- 試練を越えて、未来を創る 研究科長 学部長 辻本 雅史 2

● 研究ノート

- 教員から 臨床教育学講座 准教授 齋藤 直子 3

- 院生から 臨床教育学講座 博士後期課程3年 広瀬 悠三 3

● 社会人院生から 教育科学専攻(専修コース)修士課程2年 岡田 光恵 4

● 留学生から 教育学講座 博士後期課程1年 林 子博 4

● 学部生から 現代教育基礎学系4回生 森脇 愛理 5

- 教育心理学系4回生 田附 紹平 5
..... 相関教育システム論系4回生 門松 愛 5

● グローバルCOE：物語とこころ

- 臨床実践指導学講座 教授、ユニットC 皆藤 章 6

● 教育実践コラボレーション・センターから

- コラボレーション・センター関連 特定助教(特別教育研究) 吉田 正純 6

● 臨床教育実践研究センターから

- 臨床心理実践学講座 教授、臨床教育実践研究センター長 松木 邦裕 7

● 事務室から 専門職員(教職授業計画・教育実習担当) 潮崎 晴之 7

● 図書室から 専門職員(図書掛長) 梶山 暢子 8

● 卒業生アンケート 臨床教育学講座 教授、学生委員長 西平 直 8

● 諸記録 ①おもな出来事 ②入試結果 ③学位授与件数 ④教育職員免許状取得状況 ⑤人事異動 ⑥科学研究費補助金 ⑦ハラスメント防止に関する研修会 9~11

● 諸報

- 新任教員・事務職員紹介 12

巻頭言

試練を越えて、未来を創る

研究科長 学部長 辻 本 雅 史



3.11を境に重苦しい春となりました。少なくともこれまでの記憶にないほどの、大規模な地震と津波の自然災害に見舞われ、加えて深刻な原発事故にも追い打ちをかけられています。被災された方々やその関係者のみなさまには、心からお見舞い申し上げます。しかし思えば、この列島内に、今次の震災に無関係の者はだれひとりいないといえます。だれもが自らに関わる事態である以上、私たちの社会は、いま大いなる試練の時を迎えていました。

大学で教育と研究を事とする私たちは、この試練から目を背けることはできません。深刻で危機的な事態は、平時には見えにくい、その社会が持つさまざまな問題点や特質を、目に見える形であらわにしてきます。それはもとよりネガティブな面に限らず、たとえば被災者の忍耐強い自助と共助の姿のように、評価すべき面も少なくありません。今次の事態を見据える中から、新たな研究と教育の課題を見出し、その克服に向けて学問と教育の新たな動きを始めること、これが私たちの使命であり、責任であるといえます。その意味で、私たちの学問と教育もいま、その存在意義が大いに試されているといわねばなりません。

京都大学においても、震災対策本部が設置され、防災研等の専門家や組織によって、迅速な対応と支援活動が行われております。わが研究科におきましても、「こころの支援室」を北部総合教育研究棟4階に設置し、附属臨床教育実践研究センターのスタッフを中心に、被災者およびその支援者たちに対する心のケアの支援活動を進めております。それは、教育学研究科ならではの震災支援活動として、全学から期待され、また評価されています。

こうした重苦しい思いの中、今年も学部新入生(1回生)61名を迎えることができました。遅れていた桜も、この新入生を待ちかねていたかのように、一斉に花開きました。4月7日に入学式、そして4月21日には、カンフォーラにて、教育学部同窓会主催の新入生歓迎パーティを行い、教員および同窓生との交流を深め

ました。今次の大震災は、このフレッシュマンたちの今後の勉学や研究に必ず大きな意味を持ってくるに違いありません。彼らのこれから成長と活躍とに期待すること、大なるものがあります。

2004年の法人化以後、わが研究科は、(1)理論と実践の融合、(2)国際化、(3)卓越した若手研究者の養成、(4)教育／研究におけるフィールドの重視、この4つを柱とした改革に取り組んできました。その推進のために、積極的に外部資金を得て、グローバルCOE「心が活きる教育のための国際拠点」、および特別教育研究経費(教育改革)による「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」のプログラムを展開しております。もとより私たちは、附属学校を持たない数少ない国立大学教育学研究科・教育学部です。そのぶん、学校だけではなく、学校を越えたさまざまな場に、新たなフィールドを切り拓いてきました。そのために研究科内に教育実践コラボレーション・センターを立ち上げ、人の心や教育に関わる学問・教育のフロンティアを拡大し、わが研究科ならではの理論と実践を融合する教育と研究の活動をしております。この2つのプログラムも、2011年度末でひとつの区切りを迎えます。これまでの活動の成果をまとめる「実りの秋」となるわけです。

現在私たちは、これまでのグローバルCOEと教育実践コラボレーション・センターの活動を集大成し、新たな段階に踏み出す準備を進めております。それは、理論と実践を融合し、研究と教育を統合し、次世代の卓越した研究者養成に努めるとともに、大学が創出する教育と学術の成果を社会の中で展開し活かしていくプロジェクトをめざしております。震災からの復興はいまの私たちの社会の希求する悲願ですが、この国民的悲願に応える使命が、大学にはあります。わが研究科は、この使命を自覚し、その一翼をになう活動を今後も続けていきます。教育の成果は直ちに目に見えるわけではありません。しかし教育は未来を創りだす確かなとみなみです。息の長いご協力をお願いいたします。

研究ノート

教員から

臨床教育学講座 准教授 齋藤直子

2010年10月より半期にわたり特別研究期間をいただき、ロンドン大学教育研究所（IoE）の教育哲学部門で、客員研究員として研究および教授活動を行ってまいりました。IoEは、イギリスおよびヨーロッパにおける中心的な教育研究機関であり、世界各国から研究者や学生が集い、活発な国際交流が行われています。京都大学大学院教育学研究科も、過去4年間にわたり、グローバルCOEや大学院GPの支援のもとに、IoEとの国際交流を推進してきました。このたび、このIoEでの多彩な活動に直接従事する機会を得ると同時に、受け入れ教員となっていた教育哲学部門長（Chair）のポール・スタンディッシュ教授と、アメリカ哲学に関わる共同研究を行うことができました。またIoEでの教授活動にも携わり、授業や講演、博士論文の資格審査口頭試問などを通じて、イギリスの大学院での教育活動を初めて体験する機会を得ました。

IoEの教育哲学部門では、内外に公開する形で毎週水曜日に、「Wednesday Seminar」と呼ばれるイギリス教育哲学会の支部会が開催されています。このセミナーは1960年代からの歴史をもち、教育哲学を中心として多様な講演者を世界各国



から招いて行われます。教員、学生の立場を越えて、また言語や文化の違いを越えて活発なディスカッションが行われ、大変刺激的な学術交流の場となっています。私も2011年2月にここで講演をさせていただき、2時間にわたる長い議論の間に次々と批判的な問い合わせが投げかけられ、多角的な視点から自らの研究を問い合わせ直す機会となりました。ディスカッションの後には、IoEの地下にあるパブでビールを飲みながら、インフォーマルで和やかな対話が続けられ、その後にはレストランに移動してさらに議論が深まります。2010年12月には、ベルギーのカソリックルーベン大学との国際セミナーに、私と教育学研究科の大学院生も参加させていただきました。こうした成果を、自らの研究活動のみならず、今年度担当している国際教育研究フロンティアや京都大学留学生向けの英語の授業（KUINEP）で生かし、国際交流に携わっていきたいと願っています。

院生から

臨床教育学講座 博士後期課程3年

地理の学びというと、どのようなことを思い浮かべるでしょうか。地図の読み方の練習や地名の暗記でしょうか。しかしそもそも地理学（Geography）とは、geo-（大地）をgraphy（記述）するものであり、つまりこの地球という大地にあるすべてについての学を意味します。それは、地質や山川、植物、動物などの自然地理的なものから、大地に生活する人間の文化的・精神的営みまですべてを含みます。このように地理学とは、細分化可能なものすべて同時に含み込んで考えることができる稀有な学なのです。このような地理の包括性・総合性にいち早く目を付け、地理教育の重要性を指摘したのが、近代ドイツの哲学家、イマヌエル・カント（1724-1804）です。

カントといえば、義務や人格の完成を論じ、日本の教育基本法や学習指導要領にも影響を与えていますが、そのようなカントの道徳教育の根底には地理教育があるのではないかと考えています。カントは単に地理教育が総合的であると考えているのではなく、どこまでも個別的で多様な要素をもちながら、それでいて「世界市民性」をもたらすものと捉えています。そのような地理教育の両義性を兼ね備えてはじめて教育は道徳的たりうる、というの

広瀬悠三
(日本学術振興会特別研究員)



です。私はこのカントの地理教育について、まさに大地に生きる人間の生の変容と意味の考察を軸にして、現在博士論文を執筆しています。このことを通して、地理教育と道徳教育を問い合わせ直し、人間の形成についての新たな考察の領域を切り拓きたいと考えています。

さらにまたカントの世界市民的地理教育は、現代の教育においてどのような推進力をもちうるのでしょうか。このことを十全に考えるには、近年注目を集めておりイギリスなどで盛んな、世界市民教育やシティズンシップ教育の理論と実践をも考慮に入れる必要があります。私は修士課程のころから国際教育研究フロンティアの授業や、ロンドン大学教育研究所との国際会議に参加して、そのような世界市民教育やシティズンシップ教育の議論に大きな刺激を受けてきました。このようなよきめぐりあいがあって、今夏からロンドン大学教育研究所に留学し、カントの世界市民的な地理教育の研究を、多面的な視点から深化させることで、博士論文に磨きをかけたいと思っています。

社会人院生から

教育科学専攻（専修コース）修士課程2年

岡田光恵



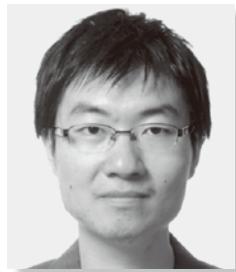
昨年4月に京都大学大学院教育学研究科に入學して、早くも1年が経ちました。入学前、私は34年間小学校の教師をしていました。退職してから、教師として何をしたのか自問しましたが答えが出にくく、唯一明らかになったのは、自身が子どもや職業から多くの学び、得たということでした。入学後、「子どもの学び」についての研究を志望し生涯教育講座に所属させていただきました。ゼミや授業は、社会人時代には経験できなかった、課題を深める貴重な時間であり、教師時代の実践に終始し、研究に着手することなく過ごしたことを考えさせられました。生涯教育講座における研究の過程で、学ぶこととは生涯にわたることであり、そして人は絶え間なく学び、生きることは学ぶことと同義であり、学ぶとは生きることなのだと考えるようになりました。学校教育は生涯にわたる学びの一部であり、人は、地域社会や家庭生活、職業生活そして日常のあらゆる事象から学ぶということが自らのなかで鮮明になりました。そして、社会

には、学びの形成の可能性を有する、フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルな教育が存在し、人々はどのようにこれらに出会い、考え、変化し、生きていくのかについて関心を持つようになりました。また、昨年から引き続き、南山城村の野殿・童仙房地区をフィールドとする、院生が主体となり研究活動するコロキアムに参加しています。本研究活動は、地域住民と共同して新しい生涯学習の場の創造をめざすものであり、昨年は、「ライフストーリーを活用した地域生涯学習の実証的研究」をテーマに地域生活における記憶に焦点をあて住民の方への聞き取り調査を行い、多くの示唆を得ることができました。今後は、異なる世代の人が多様な場で学びながら生きていくことについて、生涯を通じての自己教育をテーマに研究し、顕かにしていきたいと思っています。

留学生から

教育学講座 博士後期課程1年

林 子博



中国・福建の福州大学を卒業し、京都にやってきてからおよそ三年が過ぎようとしています。半年間研究生として過ごした後、京都大学大学院教育学研究科の修士課程に入學いたしました。指導教員の辻本雅史先生のもとで日本近代教育史を専攻しており、とりわけ明治期における国民の道徳教育をめぐる議論について研究を進めております。日本教育史を本格的に勉強し始めたのは来日してからということもあり、当初は戸惑うことが多くありました。しかし、辻本先生をはじめ、副指導教員の駒込武先生や先輩方など、多くの方々の支えのおかげで、まがりなりにも昨冬に修士論文を完成させることができました。この春より、博士後期課程1年として、再び新たなスタートラインに立つことになりました。

私が日本へ留学する契機となったのは、現在の中国社会が抱えている教育課題なのです。近年の中国においては、倫理観や信仰心のゆれについての議論が盛んになされ、いわゆる中華民族的価値観を融け込ませるような国民の道徳教育が俎上に

載せられています。こうした中国社会の動きを問い合わせの「鏡」として、私は近代国家形成期の日本に着目しました。明治期の日本においては、国民道徳をめぐる議論が幅広く展開されていました。こうした議論の光と影を歴史的に読み取ることは、中国社会の動向を相対的な観点から見たり、思想文化史の流れの中で現代社会の教育課題を考えたりする上で、重要な手がかりになると考えています。このような問題意識から、修士論文では、文部省の倫理教科書編纂事業を中心に、森有礼文政期の道徳教育をめぐる議論の様相を明らかにしました。

博士後期課程では、研究のインプットの面はもちろん、学会発表や論文執筆を通して、外への発信力もしっかりと身に付け、初心を忘れず、一層研究に勤しんでいく所存です。今後とも、皆様からの厳しくも温かいご指導・ご鞭撻を賜りたいと思います。よろしくお願い申し上げます。



学部生から



現代教育基礎学系
4回生

森 脇 愛 理

京大生になって、はや三年が過ぎ、いよいよ最終学年の年を迎えるました。

元々、私は漠然と心理学に興味を持っており、教育学部を選びました。入ってから私を待ち受けていたのは、素敵な人たちやものとのたくさんの出会いでした。自由な学風にあるからこそ、一人ひとりが強い意志を持ち、何かに向かって歩き続けている。そんな周りを見ると、いつも「私も頑張ろう。」と思うことが

できます。また、教育学部の講義では今まで抱いてきた教育や人間に対する考え方、価値観を大きく揺さぶられる体験をたくさんしています。

現在、私は臨床教育学を専攻し、特に現代社会における自己の形成・変容について考察しています。大学に入り、専門ゼミやサークルで様々な人と直接意見を交わす機会に恵まれ、その中で人の言葉の語りが他者・自己に及ぼす影響がいかに大きいかを実感し、関心を強くしてきました。

これまでの三年間は、自分が知りたい、やりたいと思ったことにとにかく手をつける、というような日々でした。しかし、この一年は一つひとつに集中し、より深く向き合っていかなければならないと思っています。残りの貴重な一年、卒論、そして夢に向けた勉強の両立が私の課題です。



教育心理学系
4回生

田 附 紗 平

教育学部に入学して早くも4年目に突入しました。時間が経つのが早く感じられ、学部生最後の1年を有意義に過ごしていきたいと考えています。

私は高校生の頃、人と関わることでプラスにもマイナスにも揺れ動く人の気持ちに興味を抱き、本学を選びました。そして現在、教育心理学系に所属し、様々な観点から幅広く心理学を

学んでいます。高校生の時に抱いていた心理学のイメージとの違いに戸惑ったこともありましたが、それでもやはり人の気持ちに対する興味を再認識し、今後も学びを深めていきたいと考えています。

また、教育学部はつながりが強い学部として有名で、私自身たくさんの素晴らしい友人に恵まれました。彼らとは何気ない話から真剣な話まですることができ、彼らとの関わりの中で私は多くの刺激や新たな気付きを得ています。私は、教育学部はただ学問を学ぶ場というものではなく、それを含めた広い意味での、人が人生を歩む上で重要な「学び」を得ることができる場であると考えています。現在、私は卒業論文の準備をしていますが、今まで培った「学び」を総動員して、そしてまた新たな「学び」を得られるように精一杯取り組みたいと思います。



相関教育システム論系
4回生

門 松 愛

卒業論文に向けて取り組んでいる今、教育学部に入って本当によかったとしみじみ感じています。入学当初はぼんやりと、人の成長に関わることを学びたいと思っていましたが、教育学部でさまざまな授業を受け、今は、世界の教育の現状に興味を持つようになりました。

文化・宗教によって異なる教育観や学校制度を知ることは、日本の教育制度が当たり前だと思っていた私には衝撃の連続で

あり、さまざま背景のなかで教育が果たしている役割、教育のあり方など興味の範囲は広がるばかりです。幅広い知識を持ち、さまざまなアドバイスをくださる先生方、いつでも親身に相談に乗ってくださる先輩方に恵まれ、いろいろなことを知り、学問する喜びを日々実感しています。

学部としては少人数の教育学部ですが、その分親密度は高く、多くの友人を作ることができました。教育という学問について話し合い、時には討論できる友人を作れたことは私の財産であり、誇りとするところです。

卒業論文は思っていた以上に大変ですが、先生方、先輩方、仲間に恵まれたこの学部で学問できる喜びを感じつつ、広い視野を持って、これから自分のフィールドを深めていきたいと思います。

グローバルCOE：物語とこころ

臨床実践指導学講座 教授、ユニットC

皆 藤 章

グローバルCOEプログラムのユニットCに参加しまして、主にふたつの領域で多様な研究を行うことができました。わたしは近年、「物語とこころ」という領域に関心を抱いていますが、いずれもそれに関連する研究です。まず、「糖尿病者の語り」というテーマです。糖尿病は現在の医療では完治の見込めない不治の病ですが、糖尿病者が生涯抱えて生きていかねばならないこの病に、医療従事者がいかに向き合っていくのか。そして何より糖尿病者自身がいかに向き合っていくのか。それは、医療が糖尿病者的人生に直接関わる一大課題です。そしてこの領域に臨床心理士の活動が不可欠であることを、糖尿病医療の実践現場における実際体験を通して確信し、学会等さまざまな機会に発信をしてまいりました。幸いなことに、多くの医療関係者に関心をもっていただいている。また、この活動は、「糖尿病医療学」という新たな臨床実践学問領域を開拓していくことに繋がっており、今後ともさらに活動を重ねていく予定です。

次に医療人類学との出会いが挙げられます。この領域の世界的権威であるハーバード大学教授のアーサー・クラインマン教授との研究討議を行う機会がもてたことは、非常に大きな収穫でした。不治の病を抱えて生きる人、終末期を生きる人に、いったいどのような臨床的コミットメントができるのだろうか。そこにおける本質は何なのか。大きなテーマですが、こうした内容について2009年から毎年、ハーバード大学のアジアセンターにあるクラインマン教授の研究室を訪れ、議論をしています。クラインマン教授とはこれからも共同研究をしていくことになっていますので、どのような展開があるのか、楽しみでもあります。

グローバルCOEプログラムによって上記の研究を深める機会を与えていただきました。今後はこれをステップとして、さらに臨床・研究活動を深めていきたいと思っています。



教育実践コラボレーション・センターから

コラボレーション・センター関連 特定助教（特別教育研究）

吉 田 正 純

教育実践コラボレーション・センターは、教育学研究科「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」の一環として、2007年4月に設立されました。教育現場から持ち込まれた具体的な問題に対し、研究分野の領域の枠を越えたより有機的な働きかけを行なえるよう、組織的にコーディネートすることを目的としています。

本センターは、「学校教育改善ユニット」「新しい教育関係ユニット」「教育空間創造ユニット」「E.FORUM」の4ユニットを、活動の柱としています。「学校教育改善ユニット」では、京都市立高倉小学校や寝屋川市立田井小学校などと連携し、授業改善の取り組みを進めています。「新しい教育関係ユニット」では、京都市立洛風中学校など、新しい教育関係を生みだすことを試みている学校との関わりを進めています。「教育空間創造ユニット」は南山城村で「野殿童仙房生涯学習推進委員会」を立ち上げ、地域と大学による共同の学びの空間づくりを目指しています。

また「E.FORUM」は、学校や地域の教育改革を推進する、スクールリーダーの育成・力量向上のため、様々な研修を行なっています。

2010年度は、10月19日に中国中央教育科学研究所の袁振国所長を招いたシンポジウム「中国の教育改革構想－これからの十年」を、また11月6日に秋田光彦氏・梅田美代子氏・奥山千鶴子氏によるシンポジウム「子育ての危機に迫る」を、それぞれセンター主催で開催しました。今年度はセンター5年目の最終年度であり、これまでの活動の目的や意義を確認しながら、大学教員・大学院生と教育現場との有機的な連携をさらに発展させていきたいと考えております。今後とも、本センターの活動にご支援・ご指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願ひいたします。





臨床教育実践研究センターから

臨床心理実践学講座 教授、臨床教育実践研究センター長

松木 邦裕



京都大学大学院教育学研究科の附属施設である臨床教育実践研究センターの主な実践業務は、市民に開かれた相談機関である心理教育相談室における心理相談です。そして、こうした臨床活動や研究の成果を市民に還元することを目的として、公開講座、リカレント教育講座を開催しています。本稿では、本年2月4日・5日の二日間にわたって開催されました第14回リカレント教育講座をご報告いたします。

リカレント教育講座は、「心の教育を考える」を基本主題として、学校教育現場等で子どもに関わる専門家とともに子どものこころや教育について考えようというものです。今年はテーマを「対応に困る子どもたちへの多面的理解と関わり」として、「落ち着かない」、「学校に来ない」など、対応が難しい子どもたちをどのように理解し関わるかを探求していく機会としました。参加者は教師、養護教諭、臨床心理士等からなります。

初日は分科会の形式で4グループに分かれ、参加者から学校現場で関わっている子どもの個別事例を提示してもらい、小グループでじっくり検討しました。そしてその日の最終時間には全体集会を持ち、分科会での理解と関わりを全員で分かち合いました。

二日目はやはり「対応に困る子どもたちへの多面的理解と関わり」と題したシンポジウムを開催しました。シンポジストとして後野文雄氏、岩宮恵子氏、神尾陽子氏がそれぞれ教師、

臨床心理士、精神科医という立場からの理解と関わりの工夫等を発言され、全体で討議しました。そこには、まさに多面的で立体的な理解と関わりが浮かび上がりました。子ども一人ひとりに目を向け、そのこころを見立てるとともに、職種等を越えたチームワークで関わることの大切さが分かち合われたと思います。講座終了後のアンケートでは、今年のリカレント教育講座によい学びを得て満足したとの回答を多数いただきました。来年も充実したリカレント教育講座を提供したいと私たち主催者は張り切っています。

ところで、3月の東日本大震災では広大な地域で莫大な数の方が被災されました。未だその痕跡は生々しく、被災された方たちの困苦は続いている。そうした方たちのこころの支援に積極的に取り組むため当センターは、本部の大西理事、西阪理事と辻本教育学研究科長のご尽力を得て、「こころの支援室」を創設しました。被災された方たち、被災地に支援に行かれた方たち、被災した子どもたちに関わる教師といった皆さんのがこころに向けた支援を実践します。こうしたこころへの支援は長期に必要です。「こころの支援室」は長い目で関わっていく心積もりです。



事務室から

専門職員（教職授業計画・教育実習担当）

昨年4月から教育学部教職担当としてお世話になり、早くも1年が過ぎました。教職科目・教育実習関連・介護等体験関連の事を担当しています。

本学では、毎年約200名程度の学生が教員免許取得志望者として、それぞれの出身高等学校等で教育実習を行い、またそのうち、中学校の教員免許取得希望者のみが、原則として、各出身都道府県の特別支援学校（2日間）及び社会福祉施設（5日間）で介護等体験を行っています。

この介護等体験については、平成10年度入学者から、小学校・中学校教員免許状取得希望者に福祉施設等で障がいのある人や高齢者に対する介護・介助等の体験が「介護等体験特例法」により義務づけられています。なお、本学では、介護等体験には単位付与していません。この介護等体験をすることにより、福祉事業に関心を寄せられ福祉の仕事に目覚め進路変更する学生もおられるかもしれません。介護等体験の申し込みは、学生本人ではできませんので、大学を通じて、先にも書いたように原則自分の出身都道府県で行います。しかし、研究の都合や郷里が遠隔地のため、京都府内で体験等実施される場合が多いです。体験

潮崎 晴之



終了後には感想文を提出してもらっていますが、その文面には特別支援学校の児童・生徒、社会福祉施設の入所者の方々の生き様やそこで勤務されている教員施設職員の介護に対する強い熱意に感動した等々、今後の自分の人生において有意義な体験になったという感想が多くあります。

教育実習は、実習校に実習を行う義務はありません。実習希望者が大学で実施する説明会に参加し、その後各自で出身校等に内諾を得に行きます。なお、出身校によっては教育実習を実施していない学校もあります。

教職をめざす学生のみなさんは、本当に自分は教員になりたいのか、教員としての素質があるのか（素質があるかどうかの判断は難しいが）、自問自答して、教育実習及び介護等体験に望んでください。

今後も側面からではありますが、学生のみなさんの支援に努めていきたいと考えておりますので、よろしくお願ひいたします。

図書室から

専門職員（図書掛長）

梶山暢子

今回は4月から新たに京都大学に来られた方向けに、京都大学の「図書館」を簡単にご紹介します。

○教育学研究科・教育学部図書室

教育学研究科・教育学部所属のみなさんの「ホーム」になるのが、この図書室です。本館西側に入口があります。あまり大きくは見えませんが16万冊以上の蔵書があります。図書の貸出だけでなく学外からの資料取り寄せや、参考資料の使い方のご案内など、「まずはここから」始まる、かかりつけ医のような存在と思っていただければ幸いです。

○学内の図書館・室

京都大学には現在50をこえる図書館・室があります。学部生の方であれば、附属図書館や総合人間学部の図書館を利用することも多いでしょうし、専門に応じて馴染みの図書館をお持ちの方もいらっしゃるかもしれません。多くの館・室が互いに連携・協働することで広範囲の資料提供が可能になっています。

○京都大学図書館機構

これらの連携体制の基盤となるのは「京都大学図書館機構」です。これは建物や場所ではなく、MyKULINEのようなオン

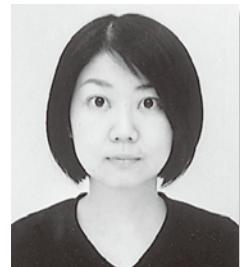
ラインサービス、多くの電子ジャーナル・データベースを提供するなど「世界最高水準の教育・研究拠点に相応しい

学術情報基盤としての役割を担う」¹ 組織の名称で、サービスの窓口は主としてウェブサイト²です。多様な文献を素早く探せる検索窓、学内各館・室の開館日程やマップ、効率のよい資料探しのためのガイドなどもあります。またニュース欄には最新のデータベースや資料のご紹介、文献管理ツールの利用法講習会のご案内など多くの情報が掲載されます。ぜひご活用いただきたいと思います。

教育学研究科・教育学部の図書室は小さな図書室ですが、その背後には広大な知の集積が広がっています。これらを必要に応じて存分に活用していただくためのお手伝いができるばと考えています。ご要望、ご質問等、お気軽に寄せください。

¹『京都大学図書館機構の基本理念と目標』より

²<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>



卒業生アンケート

臨床教育学講座 教授、学生委員長

西平直

学生たちは大学に満足しているのか、学生たちの声を聞いてみたらどうか…と、そんな話になりました。正式に言えば、「ディプロマポリシーの達成度を卒業生による評価を通して確認し、今後の学部改革に資するために…」。もちろんそんな説明はしませんでした。「お感じになることなど、なんでも結構ですから、一言、お聞かせ下さい」。

1. 授業について（面白かったこと、記憶に残ること、不満が残ることなど）。2. 卒論について（困難に感じたこと、書き終わって感じることなど）。3. 進路について（4月以降の進路について、就職活動について）。4. 教育学部に改善を期待する点など。5. その他、学生生活を送る中で感じたことなど、なんでも。

すべて自由記述でしたから、数字にして結果を報告することはできないのですが、ごく簡単にいくつか紹介いたします（今年度卒業生61名のうち、卒業式出席が約50名、そのうち47名から回答をいただきました）。

1. 授業については、多くの人が満足。充実していたようです。でも中には苦言もあって、全学共通科目について「単位認定が甘すぎる」。専門科目について「取りたい授業の時間がかかっている。時間割を工夫してほしい」など。

2. 卒論については、たくさん、感想がありました。例えば、「データを取るのが思った以上に大変だった。もっといいものが書けたはずと思い悔しい」。「もっと早めに行動を取るべきだった。でも達成感で一杯です」。「先輩方のアドバイスがなければ完成しませんでした」。「ひどかったけどあれが限界。学部生のレベルってこんなもんですね。ごめんなさい」。「書いている時は

途方もない作業で大変に感じましたが、書き終わってみると書き足りないことが思い浮かんでき、また書きたくなってきた」。

あるいは、「自分の思考内容を文章にすることの難しさを味わった」。「自分で論理を組み立てる非常に良い訓練になります」。「やり遂げられてよかった。少し自信になりました」。問題点としては、「図書館を使えない時期があったことは辛かったです」。「系によって指導に差があると思いました」などなど。

3. 就職活動については、「厳しかった」が一人。「していません」と「第一希望の職につけました」が半々。記入なしも目立ちました。「同窓会などOB-OGとのつながりを生かすべきだと思った」との感想もありました。

4. 要望として目についたのは、「教職を希望する人のためのサポート」を望む声が数人から。また、「すべての階に男女のトイレが欲しいです」という声も数人から。「掲示物をネットにアップして欲しい」という声も複数ありました。

その他、「教育学部祭」が深い思い出になっているようです。「非常に有意義だったと思います」、「最高の四年間でした」…と、肯定的な感想が目立ちました。なお、卒業式当日にアンケート用紙を配布したため、「ゆっくり書く時間がない」という意見がいくつか寄せられました（来年は何らか工夫します）。

新たな歩みを始めておられる卒業生たちに心からのエールを送りたいと思います。



諸 記 錄

◆ 2010年12月～2011年4月のおもな出来事

[2010(平成22)年12月]

- 14日(火) 教育実践コラボレーション・センター主催 京都大学大学院教育学研究科・北京師範大学教育学部 交流協定調印式記念講演「中国の教師教育モデル」周作宇教授(北京師範大学教育学部長、教育学部本館)
- 14日(火) 中国・北京師範大学教育学部との学術交流協定締結(更新)
- 15日(水) 教育実践コラボレーション・センター主催「京都大学大学院教育学研究科・北京師範大学教育学部 日中教育学・大学院生交流会」(楽友会館)
- 20日(月) 第28回GCOE共催講演会「Left & Right: The Psychological Basis of a Political Distinction」John Jost 教授(ニューヨーク大学心理学部、京都大学稻盛財団記念館)
- 21日(火) 第5回GCOE共催ワークショップ「ニューヨーク大学 John Jost 教授を囲む若手セミナー」(京都大学教育学部本館)

[2011(平成23)年1月]

- 9日(日) 第4回GCOE主催シンポジウム(京大「心が生きる教育のための国際的拠点」・慶大「論理と感性の先端的教育研究拠点」)「トランスナショナルな心・人・社会」(京都大学百周年時計台記念館)
- 21日(金) 第30回京都大学GCOE主催講演会「The reminiscence bump in the temporal distribution of autobiographical memory(自伝的記憶の時間的分布におけるレミニセンスバンプ)」Steve M. J. Janssen 博士(北海道大学・日本学術振興会外国人特別研究員、京都大学教育学部本館)
- 29・30日(土・日) 第12回GCOE主催ワークショップ「International Workshop for Young Researchers "Knowing Self, Knowing Others"」(京都大学百周年時計台記念館)
- 31日(月) 第31回京都大学GCOE主催講演会「私のライフストーリーと沖縄の教育実践」今津新之助氏(有限会社ルーツ代表、総合研究2号館)

[2011(平成23)年2月]

- 4・5日(金・土) 附属臨床教育実践研究センター主催 第14回リカレント教育講座「『心の教育』を考える—対応に困る子どもたちへの多面的理解と関わりー」(百周年時計台記念館)
- 10日(木) 第32回京都大学GCOE主催講演会(第3回大学院修了後キャリア形成プログラム)「企業における大学院修了者の採用とキャリアパス—パナソニックのケースを中心に」前田尚樹氏(パナソニック人材開発カンパニー元社長、総合研究2号館)
- 17日(木) ハラスメント防止に関する研修会「アカデミック・ハラスメントの防止にむけて」奈良県立医科大学講師御輿久美子氏

[2011(平成23)年3月]

- 4日(水) 第33回京都大学GCOE主催講演会「The role of the anterior temporal lobe and other regions in semantic cognition and language」Lambon Ralph 教授(マンチェスター大学、総合研究2号館)
- 5日(土) 教育実践コラボレーション・センター共催シンポジウム「異変する現代社会のなかで『教えること』とは—高等教育・生涯教育をめぐる日英研究者の対話—」P.ジャーウィス氏(英国サリー大学名誉教授、楽友会館)
- 10日(木) 第29回GCOE共催講演会「New finding in the Betula Study」Lars-Goran Nilsson 教授(Stockholm University, Sweden)、「List context effects in categorizing fussy and well-defined concepts」Vinzenz Morger 教授(Thurgau University of Teacher Education, Switzerland、総合研究2号館)
- 11日(金) 教育実践コラボレーション・センター／教育空間創造ユニット主催「ローカルな知とエコ=ロジカルな人間の形成」、M.ラニ=ベル氏(ナント大学教授)他(永運院<京都市左京区黒谷>)
- 16日(水) 和歌山県教育委員会との連携協力協定締結
- 24日(水) 教育学部同窓会主催 卒業生歓送会(教育学部本館)
- 26日(土) 教育実践コラボレーション・センター主催 2010年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「第6回実践交流会」(総合研究2号館、総合博物館)

[2011(平成23)年4月]

- 21日(木) 教育学部同窓会主催 新入生歓迎会(カンフォーラ)

◆ 平成23年度入試結果

・教育学部

日 程 等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文 系	5 0	1 8 1	1 7 8	5 1	6 1
	理 系	1 0	3 5	3 5	1 0	
第3年次編入学		1 0	2 3	1 9	7	6

・教育学研究科

課 程 等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修 士 程	研究者 養 成 コ ース	1 8	3 9 (1 0)	3 9 (1 0)	1 7 (3)	1 6 (3)
	臨床教育学専攻	1 4	5 1 (1)	5 0 (1)	1 1	1 1
博 士 後 期 課 程	教育科学専攻(専修コース)	1 0	4 7	4 6	1 0	1 0
	臨床教育学専攻(第2種)	若干名	4	4	0	0
博士後期課程臨床教育学専攻 (臨床実践指導者養成コース)		4	8	8	3	3
博士後期課程編入学		若干名	9 (1)	9 (1)	6 (1)	6 (1)

()内の数は外国人留学生で内数

◆ 平成22年度学位授与件数

(H23.3.31現在)

学 位 名 等		授 与 者 数
学 士	教育科学科	6 1
修 士	教育科学専攻	2 9
	臨床教育学専攻	1 4
博 士	課程博士	2 2
	論文博士	2

◆ 教育職員免許状取得状況

平成22年度(2010)

中学校専修免許状	0
中学校 1 種免許状	1
高等学校専修免許状	1
高等学校 1 種免許状	2
特別支援学校 1 種免許状	0

◆ 人事異動 (H22.12.2～H23.6.1)

平成22年12月31日付け

宮崎 康子 研究員 (研究機関)
小島 隆次 研究員 (グローバルC O E) 辞職
小島 隆次 研究員 (グローバルC O E) 辞職

平成23年1月1日付け

小島 隆次 特定助教 (グローバルC O E) 採用
浦田 悠 研究員 (研究機関) 採用

平成23年3月31日付け

井上 嘉孝 助教 (附属臨床教育実践研究センター) 辞職
高嶋 雄介 特定助教 (附属臨床教育実践研究センター) 辞職

(任期満了退職)

趙 卿我 特定助教 (特別教育研究)

大家 聰樹 研究員 (研究機関)
山本 斎 研究員 (研究機関)
安田 裕子 研究員 (科学研究) (教育方法学)
DE CARVALHO FILHO, Moises Kirk 研究員 (学術研究奨励)
(教育認知心理学)

平成23年4月1日付け

子安 増生 教授 教育研究評議会評議員
(任期23.4.1～25.3.31)
前平 泰志 教授 教育研究評議会評議員
(任期23.4.1～25.3.31)

松木 邦裕 教授 附属臨床教育実践研究センター長
(任期23.4.1～25.3.31)

田中 耕治 教授 現代教育基礎学系長
(任期23.4.1～24.3.31)

皆藤 章 教授 教育心理学系長

岩井 八郎 教授 相関教育システム論系長
(任期23.4.1～24.3.31)

松下 姫歌 准教授 (附属臨床教育実践研究センター) 採用
広島大学大学院教育学研究科准教授から

趙 卿我 助教 (教職関連) 採用
古川 裕之 特定助教 (附属臨床教育実践研究センター) 採用

森本 裕子 研究員 (学術研究奨励) (教育認知心理学) 採用
小宮 あすか 研究員 (学術研究奨励) (教育認知心理学) 採用
佐伯 恵里奈 研究員 (科学研究) (教育認知心理学) 採用

平成23年4月30日付け

小島 隆次 特定助教 (グローバルC O E) 辞職
平 知宏 教務補佐員 (教育認知心理学) 辞職
森本 裕子 研究員 (学術研究奨励) (教育認知心理学) 辞職

平成23年5月1日付け

常深 浩平 研究員 (グローバルC O E) 採用

平成23年6月1日付け

浦田 悠 研究員 (研究機関) 採用
小宮 あすか 研究員 (研究機関) 採用
森本 洋介 研究員 (研究機関) 採用
宮嶋 由布 研究員 (研究機関) 採用
小林 伸行 研究員 (研究機関) 採用

◆ 科学研究費補助金

23年度

研究種目	研究題目	研究担当者
新学術領域研究	顔表情の認知プロセスに及ぼす遺伝子・環境の相互作用機序に関する認知科学的研究	野村 理朗
基盤研究(A)一般	21世紀市民のための高次リテラシーと批判的思考力のアセスメントと育成	楠見 孝
基盤研究(A)海外	多文化横断ナラティヴ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発	山田 洋子
基盤研究(B)一般	ソフト・パワー構築に向けたメディア文化政策の国際比較研究	佐藤 卓己
基盤研究(B)一般	E. FORUMカリキュラム設計データベースを活用したスタンダードの開発	矢野 智司
基盤研究(B)一般	「伝承・習い事」文化における継承と生涯学習の現代的課題に関する日中韓比較研究	渡邊 洋子
基盤研究(B)一般	教育資源調達手法総動員による教育組織パフォーマンス向上施策の学際的研究	高見 茂
基盤研究(B)一般	辺境における空間的・社会的移動と教育—奄美諸島の経験を基軸とした比較史的研究—	駒込 武
基盤研究(B)一般	「女性文化人」の社会的形成に関する歴史社会学的研究	稻垣 恭子
基盤研究(B)一般	精神力動的心理療法家のトレーニングに関する開発的研究—国際比較調査を通して	松木 邦裕
基盤研究(C)一般	心理臨床場面における対話の構築	桑原 知子
基盤研究(C)一般	批判的図書館史研究の構築	川崎 良孝
基盤研究(C)一般	1990年代以降の学歴と初期キャリアの動態に関する比較研究	岩井 八郎
基盤研究(C)一般	音韻的作動記憶を支える意味記憶とプロソディの相互作用	齊藤 智
基盤研究(C)一般	「活用」を促進する評価と授業の探究	田中 耕治
基盤研究(C)一般	オールタナティヴ教育における「稽古」の思想と「宗教性・精神性」の教育人間学的解明	西平 直
基盤研究(C)一般	教育空間の変容と自己形成の相互関係についての基礎的研究	前平 泰志
基盤研究(C)一般	ドイツにおける大学自治観の形成と現代における大学改革との連関に関する研究	金子 勉
基盤研究(C)一般	東アジア諸国・地域における大学院入学者選抜方法の比較研究	南部 広孝
基盤研究(C)一般	衝動的反応の制御メカニズムの個人差の解明に関する認知科学的研究	野村 理朗
基盤研究(C)一般	セラピストの発話に関する言語論的分析と訓練モデルの構築	大山 泰宏
基盤研究(C)一般	「褒め方・叱り方のタクト」—教育力育成と信頼の場の創出に関する実証研究	鈴木 晶子
基盤研究(C)一般	新教育運動期における学校の「アジール」をめぐる教師の技法に関する比較史的研究	山名 淳
基盤研究(C)一般	<他>文化理解のための政治教育：アメリカ哲学をめぐる文化横断的対話研究	齋藤 直子
基盤研究(C)一般	途上国の中等学校等の多様化と正規性・非正規性に関する国際比較研究	杉本 均
挑戦的萌芽研究	「心の理論」の獲得とプラグマティックな言語理解の発達	子安 増生
挑戦的萌芽研究	女性の教養と理想的女性像に関する比較社会史的研究	稻垣 恭子
挑戦的萌芽研究	三項関係ナラティヴ・ミーディアムの開発—糖尿病患者と医師の支援と教育	山田 洋子
挑戦的萌芽研究	「NHK青年の主張」における青年文化のメディア社会学	佐藤 卓己
挑戦的萌芽研究	専門職教育と専門職性に関する異業種間比較研究—成人教育学の観点から	渡邊 洋子
若手研究(B)	科学者の探求手法を体験することで科学的思考を学ぶカリキュラムの検討	中池 竜一
若手研究(B)	パフォーマンス課題の効果的活用に関する国際比較調査	西岡加名恵
若手研究(B)	「現実・潜在」関係に関する思想史的研究—ホリスティックな知の再検討	小野 文生

◆ ハラスメント防止に関する研修会



本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高め、ハラスメントの防止を図り、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、毎年、研修会を開催しています。

平成22年度は、平成23年2月17日(木)に開催し、奈良県立医科大学講師、NPOアカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク代表 御輿久美子氏による「アカデミック・ハラスメントの防止に向けて」と題する講演が第1会議室であり、教員、事務職員、学生の約30名程度の参加を得て、意識を高める機会となりました。

諸 報

◆新任教員・事務職員紹介（「」内は本人の抱負）



松 下 姫 歌 準教授

所属講座：臨床心理実践学講座
専 門：心理臨床学

「広島から10年ぶりに戻って参りました。臨床実践と研究と「生きること」をひとつつながりのものとして取り組んでいきたいと思います。」



古 川 裕 之 特定助教

所属講座：附属臨床教育実践研究センター
専 門：心理臨床学

「4月から着任いたしました。臨床教育実践研究センターでの活動に、自分なりのペースで日々取り組んでいきたいと思います。」

立 木 康 介 協力教員

(人文科学研究所准教授)

所属講座：心理臨床学講座
専 門：精神分析

「人文研からの協力教員として参加させていただくのは私が初めてとうかがっています。悪しき前例にならぬよう心して参ります。」

～編集後記～

「ニュースレター」22号をお届けします。3月11日に東日本大震災が起きてからこの文章を書いている5月下旬までに2か月半が過ぎましたが、亡くなられた方の数は今でも毎日増えていますし、原子力発電所事故への対応が連日報じられています。被災地の一日も早い復興を願わざにはいられません。京都での日々の生活はこれまでと大きくは変わっていないように見えますが、社会の雰囲気はやはり以前と違って感じられます。そうした中で、3月には無事に卒業生を送り出すことができました。今号では、卒業生に聞いた感想や意見の一部を西平直教授にまとめていただきました。そうしたものも参考にしながらより満足度の高い教育を展開することが引き続き私たちの使命なのだろうと思います。（HN）



京都大学教育学研究科 ・教育学部広報委員会

委員長 松木 邦裕 教授（臨床心理実践学講座）

委 員 辻本 雅史 教授（教育学研究科長・教育学部長）

委 員 南部 広孝 準教授（比較教育政策学講座）

委 員 斎藤 直子 準教授（臨床教育学講座）

委 員 吉井 晃 事務長

委 員 谷川嘉奈子 専門職員（総務掛長）

委 員 西本 幸江 専門職員（教務掛長）

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075(753)3003